

【大齋節の半ばを伝統的にはどんなふうに取り扱っているのか】

～レント第四主日について～

神の民よ喜べ、神の家を愛する すべての者よ、ともに集え。

神は豊かな慰めで あなたがたを満たしてください。 (カトリック教会ミサ典書 入祭唱)

長いレント期間の折り返し点に位置する日曜日 (今年は3月19日)。アドベント (降臨節) 第三主日と同様に、バラ色の祭服が用いられ、オルガンが演奏され、祭壇に花が飾られる。

この日くらい、いろいろな名称がある日も珍しい。英語でいうミッド・レント・サンデーは、そのまま、レントのなか日という意味だ。

【喜びの主日】 Laetare Sunday, Rejoice Sunday・・・ローマ・カトリックにおいて、この日のミサの入祭唱が「神の民よ喜べ」(イザヤ66:10)で始まることに由来する。ラテン語の句“Laetare Jerusalem”から、Laetare Sunday, 英語の句“Rejoice, O Jerusalem”から Rejoice Sunday と呼ばれるようになった。

【バラ色の主日】 Rose Sunday・・・先に触れたアドベント第三主日(喜びの主日)も同じ名称で呼ばれているが、オックスフォード英語辞典では、Rose Sunday の定義として、こちらのレント第四主日しか載せていない。ローマ教皇が折々にカトリックの元首や聖堂などに贈る「黄金のバラ (Golden Rose)」の祝福がこの日に行なわれる、というのが名称の由来と思われる。また、レントの中間まで無事に来たことを祝うためにバラの花を教会にもち寄った慣習から来た、とする説もある。もちろん、司祭のバラ色の祭服から来ていると考えることもできる。

【リフレッシュメント・サンデー Refreshment Sunday・・・イングランド聖公会の祈禱書では、この日に読まれる福音書として、イエスが五千人に食事を与える奇跡の場面(ヨハネ6章)を載せている。このため、19世紀以降に、「リフレッシュメント(気分を一新させること、または食事の意)の主日」と呼ばれるようになった。

(注)日本でも文語の時代は大齋第四主日の福音書でしたが、3年サイクルの現在は特禱にだけ痕跡。小林)

【母の日主日 Mothering Sunday・・・こちらの名称も、イングランド聖公会の祈禱書が起源。その日の使徒書の箇所が「エルサレムは・・・自主にして我らの母なり」(ガラテヤ4:26)であることから、マザリング・サンデーと呼ばれた。マザリングとは17世紀頃に始まった慣習で、遠くの土地へ奉公に出た子どもたちがミッド・レント・サンデー、すなわちこの日に休暇をもらい、ケーキや贈り物をもって里帰りした。また、寄宿学校に入っている子どもたちも、この日に帰宅して母の元で過ごすことが許された。アメリカ起源の母の日は5月の

第二日曜日だが、英国ではこの日が母の日とされている。この日は別名「シムネル・サンデー (Simnel-Sunday)」といい、この日にシムネル・ケーキというフルーツケーキを食べる習慣はいまでも地方に残っている。その地域のカテドラルや、洗礼を受けた教会(母教会)を訪問する人もいる。



八木谷涼子著『キリスト教歳時記 知っておきたい教会の文化』より

LENT

レント(四旬節、受難節、大齋節)

(これはレントのシンボルです。訓練のムチのようですね。小林)